



月刊 動力労働千葉

国鉄千葉動力車労働組合

〒280 千葉市要町2番8号(動力車会館)

電話 (鉄電) 千葉 2935・2936 番
(公) 千葉 (22) 7207 番

90.8.6

No.3264

再び 戦争の歴史を繰返すな!

被爆45周年にあたり



表紙写真＝原爆で破壊された浦上天主堂（1945年9月1日、長崎、撮影：松本安一）

反戦反核反原発の叫び

八月広島・長崎反戦闘争をむかえるにあたり、全ての組合員の皆さんが、いま一度反戦闘争、反核・反原発闘争について考え、たちあがることを訴えます。

今年には被爆四五周年にあたります。

第二次帝国主義戦争の結果、二発の原子爆弾が日本に落とされ、一瞬にして二〇万人以上の人々が命を失い、四五年たったいまでも被爆者を苦しめています。

ところが核兵器は廃絶されるどころか、全人類を何百回と殺りくできるほどの量が作られ続けています。

さらに核兵器はアメリカのトマホークにみられる様に、核の運搬手段が小型・精密化されることをおとして、「戦争の抑止力」としてではなく、「使いやすい」兵器として、実戦にむけて強化されているのです。

非核三原則を踏みにじり、核・非核両用の海洋発射巡航ミサイル・トマホークを搭載した米原潜が今年だけでも六回横須賀に寄港し、横須賀を母港とする米第七艦隊は九隻のうち四隻までがトマホーク搭載艦になっていきます。そして政府・自民党政権は、アメリカが「(核が)あるとは言っていないから(核は)ない!」という理由で、公然と核兵器の持ち込みを容認し、それをもって「日本」自身の核武装化にむけた地ならしにさえしようとしているのです。

「いま世界はデタント(緊張緩和)にむかっている」などと宣伝されていますが、実際には、日米対立、東西両ドイツ統一をはじめとして、第二次大戦以来の戦後のワク組みの崩壊と新たなワク組みの形成にむけて、帝国主義間の必死の争闘戦

と世界市場のうばい合いという激烈な時代の到来をむかえているのです。そしてそこでは最後にモノを言うのは軍事(力)だということです。

戦争とは、「形をかえた政治の延長である」という言葉に示されるように、特に日本(日帝)にとつて軍事大国化・核武装化とは、これからの経済争闘戦、とりわけ日米対立の激化の中で、日本支配階級が生きのびて行くために不可欠のものとして、強化しようとしているのが現実です。

こうした背景の中で、今秋の天皇即位の礼、大嘗祭もやられようとしていけるし、その狙いは戦争のできる国づくりのためにかげられた重大な攻撃としてあるといえます。

従って今、労働者に反戦闘争への決起が求められています。

核と共存はできない!

同時に被爆四五周年にあたり強調したいことは、反核・反原発闘争に総力を

「八、六広島」「八、九長崎」を契機に、反核・反原発への認識を深め、闘う住民・労働者との連帯をいっそう強めるために、奮闘するものでなければならぬと思います。

「原子力の平和利用」も全くのペテンにすぎません。使用済み核燃料は数万年にわたって強い放射能を放出し続けること一つをとつても、人類と共存できるわけではないのです。

「八、六広島」「八、九長崎」を契機に、反核・反原発への認識を深め、闘う住民・労働者との連帯をいっそう強めるために、奮闘するものでなければならぬと思います。

で立ちあがることを求められているということですから、今、政府は全国に原子力発電所の建設をおしすすめる、青森では「核燃料サイクル三施設」を地元住民の反対をおしきって強行しています。

八六年四月のソ連・チエルノブイリ原発事故にもあきらかなように、原発は「安全・クリーン」ではありません。

「原子力の平和利用」も全くのペテンにすぎません。使用済み核燃料は数万年にわたって強い放射能を放出し続けること一つをとつても、人類と共存できるわけではないのです。

